

9月11日(木) 研究発表1 第3室(311)

分野／Field: Speaking, Others (Cross-Cultural Communication)

英語スピーチアクト・コーパスによる「提案・提言(Suggestion)」の 語彙・文法・会話ストラテジー分析研究

A Study of Lexicogrammatical and Discourse Strategies for “Suggestion” with the Use of the English Speech Act Corpus

鈴木 利彦(早稲田大学)

世界に通用する英語運用力の養成を目指す CLT (Communicative Language Teaching) の重要性が唱えられる中で、文脈にそって相手の発話を理解し、そして自らが相応しい表現を発話するための Pragmatic Ability (語用論的言語運用能力) の養成がますます重要視されてきている。本発表では、発表者が日本学術振興会の科学研究費補助(課題番号 18820028) の助成により 2007 年にアメリカ・ミズーリ州で大学生を対象に行ったデータ収集の結果を基に、英語母語話者(本研究ではミズーリ州在住のアメリカ人大学生) が「提案・提言(Suggestion)」を、①どのような状況で、②どのような語彙を用い、③どのような文法構造を用い、④どのような意味公式 (semantic formulas) を用いて行うか、を中心に量的・質的分析の結果を発表する。

英語教育に於ける語用論的運用能力養成の重要性が唱えられて久しいが、語彙・文法指導の技法がすでに確立されているとも言える状況に比較すると、この分野では「何をどのように教えるか」のノウハウがほとんどないといっても過言ではない。英会話学習用教材においても、特定の状況で限定的な表現を用いて練習するドリルやエクササイズが主で、スピーチアクトを行う際に必要な語彙・文法・意味公式やボライトネス・ストラテジーの包括的な学習は不可能に等しい。実際の会話では、場面に応じて自分が持っている表現 (expressions at hand) を自分の意思に基づいて選択・使用する能力が必須である。それ故、学習者が状況に応じて使うことができる表現を数多く学習し、選択できる表現を可能な限り多く持つておくことが必要である。この点において、コーパスデータに基づいて作成された教材で、「スピーチアクト」に付随する状況、語彙、文法、コミュニケーション・ストラテジー、ボライトネス・ストラテジーを数多く学べることは学習者にとって利点が多いと考えられる。

今回紹介する「スピーチアクト・コーパス (SAC)」のデータは、発表者が 2007 年 2 月と 9 月にアメリカ・ミズーリ州の大学生 100 名以上を対象に、DCT (Discourse Completion Test) とロールプレイを使用して収集したものである。データ収集後、Wordsmith を用いて語彙と文法の解析を行い、またセンテンスレベルで会話ストラテジー分析の annotation を行った。これにより、アメリカ人大学生がどのような状況で、

どのような語彙、文法、意味公式を用いて「提案・提言」を行うか、その傾向をはっきりと把握することができた。このデータを教材として使用し、適切なシラバスを用いて指導することにより、日本人英語学習者が、(1)このスピーチアクトに於いてはどのような言葉やストラテジーが使用されるかを受動的に学習する事と、(2)状況や自分の意思に合わせてふさわしい表現を選択し使用することを能動的に学習する事、の2つが可能になる。この教材の実際に使用については、発表者が2007年前・後期に上智大学で行った「スピーチアクト学習プロジェクト」にも言及する予定である。